

〔研究ノート〕

ゼノンのパラドックスについて (1)

瀬 戸 一 夫

この研究では、ゼノン（ゼーノーン）のパラドックスが、かれと同じ紀元前 5 世紀にギリシアで活躍したと考えられているアナクサゴラス（アナクサゴラス）の視点から解釈される。したがって、現存する複数の断片や記録にもとづくとはいえ、各パラドックスに秘められたゼノン本人の意図が探られるのでもなければ、かれの逆説的な議論の妥当性が批判的に検討されるのでもない。課題とされるのは、ゼノンの各パラドックスがどのように解釈されていたとすれば、非生成論とも特徴づけられる⁽¹⁾ アナクサゴラス独自の自然論が整合的に復元されるのかという問題を追究することである。この点で、本研究はアナクサゴラス自然論の復元にむけた、あくまでも準備作業にすぎないといってよいだろう。たしかに、ゼノンの著作がアナクサゴラスの著作に先行していたのか、むしろその逆であったのかは現在でも不明である⁽²⁾。このため、もしもアナクサゴラスの著作が先行していたのであれば、ゼノンはその著作で展開されている自然論をも視野に収めたうえで、当時の優勢な自然論すべてに対し、破壊的な論駁という仕方でも挑戦していたのかもしれない。仮にそのとおりだとすれば、アナクサゴラスがゼノンのパラドックスを踏まえて、あるいは克服して自らの理論を構築したと考えるのは外的外れである。しかし、たとえゼノンの論駁がアナクサゴラスの自然論をも標的にしていたのだとしても、その論駁がどのような意味で、またどの程度まで有効であったのかを探ることは、思想史研究の一課題として許容されるのではないだろうか。本研究はその試みにほかならない。

第1節 現存する断片の時制表現と論理構造

まずは、基本的な準備作業として、いくつかの現存する断片を引用して訳出することにしよう。次にあげるのは、6世紀のシンプリキオスが著した『アリストテレス「自然学」注解』の一部分であり、ゼノンの著作から引用されていると、かねてより推定されてきた文言（著作断片）を含んでいる。なお、訳文中の〔 〕内は、訳者による補足や換言などである。また、訳文では文脈から、直説法未来の「増大することになる *αὐξήσεται*」との呼応関係を特に重視して、直説法現在の《*ἐλαττόν ἐστι*》ではなく、直説法未来の《*ἐλαττον ἔσται*》を採用している。

DK, B2; LM, D7 Simpl. *In Phys.*, 139, 9-15⁽³⁾.

ἐν δὴ τούτῳ δείκνυσιν [.] ὅτι οὐ μήτε μέγεθος μήτε πάχος μήτε ὄγκος μνηεῖς ἐστίν, οὐδ' ἂν εἴη τούτο. “εἰ γὰρ ἄλλῳ ὄντι, φησί, προσγένοιτο, οὐδὲν ἂν μεῖζον ποιήσειεν· μεγέθους γὰρ μηδενὸς ὄντος, προσγενομένου δὲ [.] οὐδὲν οἶόν τε εἰς μέγεθος ἐπιδοῦναι. καὶ οὕτως ἂν ἤδη τὸ προσγιγόμενον οὐδὲν εἴη. εἰ δὲ ἀπογιγόμενον τὸ ἕτερον μηδὲν ἐλαττόν ἐστι, [ἐλαττον ἔσται] μηδὲ ἀπ' ἀπογιγόμενου αὐξήσεται, δῆλον ὅτι τὸ προσγεγόμενον οὐδὲν ἦν οὐδὲ τὸ ἀπογεγόμενον.”

まさにその〔議論の〕なかで、大きさも厚みも嵩も何ひとつないものは、存在していないだろう〔希求法現在〕ということ、かれ〔ゼノン〕は論証している。実際、かれは次のように述べている。「なぜなら、存在している他のものに付け加えられ〔希求法現在〕ても、それは何もより大きくしない〔希求法アオリスト〕からであり、大きさがまったくないのであれば、付け加えられていても、大きさに関しては増えること〔アオリスト不定詞〕ができないからである。かくして、付け加えられているものは、もはや無であろう〔希求法現在〕。また、取り除かれていても他方〔取り除きを被っている側〕がより小さくならず〔直説法未来〕、さらには、付け加えられていても、他方〔付け加えを被っている側〕が増大することにならない〔直説法未来〕のであれば、付け加えられているものも取り除かれていたものも、まったく存在していなかった

〔直説法不完了過去〕ことは明らかである。〕

シンプリキオスは冒頭で、著作から引用するに先立ち、ゼノンの論証についてある指摘をしている。その指摘によると、ゼノンが「大きさも厚みも嵩も何ひとつないもの」について論証しているのは、希求法の現在時制で表現された「存在していないだろう *οὐδ' ἄν εἴη*」ということである。この叙法には文法用語で、しばしば「可能性の希求法 *optativus potentialis*」と呼ばれる用法があり、多くの場合に小辞《*ἄν*》を伴って、想像や仮定により起こりうる事柄を表し、現在時制でも大半は未来における可能性または時のない提言となる。他方、分かりやすさのために誇張した言い方をすると、直説法の現在時制は継続している動作や状態の「真っ只中にある」といった意味合いをもつ。シンプリキオスの指摘を「かれは論証している *δείκνυσι(ν)*」と訳出したのは、この意味合いを表すためでもある。また、直説法不完了過去は、現在時制が過去の時点に移行したもので、動作や状態が「かつて」継続していたことを表す。

さて、断片の冒頭にある条件文でも、再び希求法が用いられている。この条件文は、条件節と主節（帰結節）のいずれも希求法であり、後者に小辞《*ἄν*》が伴う形式であることから、実現する可能性の少ない未来を仮定する内容であり、また「というのも *γάρ*」という言い方からも分かるように、理由を説明する一文になっている。主語が省略されているとはいえ、シンプリキオスの指摘が正しく、引用の仕方も適切であったとすれば、省略されている主語は「大きさも厚みも嵩も何ひとつないもの」であろう。そのようなものは、存在している他のものに付け加えられても、ゼノンが述べているとおり何もより大きくしない。しかし、これだけでは、大きさも厚みも嵩も何ひとつないものが存在していない理由を、かれはまだ十分に説明できていないと考えている。だからこそ、再び《*γάρ*》を伴った補足説明が、直後に続いているのではないだろうか。いずれにせよ、当の補足説明を読み解こうとすると、現在分詞その他が属格で連続した難解な文節になっている。

ギリシア語の分詞には「独立属格 *genetivus absolutus*」と呼ばれる用法がある。これは近代語の独立分詞構文にほぼ相当する用法で、条件や理由その他の関係を表し、条件節（従節）の代わりに広く用いられていた。近代語との大きな違いは、分詞も分詞の意味上の主語も属格になる点と、

文脈からして明確な場合は、意味上の主語がしばしば省略される点である。以上に注意して読むと、該当する「大きさがまったくない *μεγέθους* […] *μηδενός ὄντος*」は、現在分詞《ὄν》の属格に意味上の主語である《*μέγεθος*》の属格が伴った独立属格であるから、条件または理由を表していることが分かる。そして、直後に位置する現在分詞《*προσυνομένου*》もまた属格であり、その意味「付け加えられている」の主語は文脈から、直前の「大きさがまったくないもの」であることが明確である。このため、独立属格でありながらも、意味上の主語は省略されているのであろう。以上のように読み解けば、補足説明が言及しているのは、省略されている「大きさも厚みも嵩も何ひとつないもの」というより、それが付け加えられている側、つまり付け加えを被っている側である。したがって、大きさに関して増えることができないというのは、付け加えを被っている側の事情にはほかならない。すなわち、大きさがまったくないものは、それ自身の事情からではなく、付け加えを被っている側の事情にもとづいて「もはや無であろう」と、ゼノンによって結論づけられていたのである。

付言すると、補足説明の最後にある「増えること *ἐπιδοῦναι*」は、過去に起こったことを単に示すだけのアオリストという時制の不定詞（動詞の不定形）である。ギリシア語の動詞は間接話法の場合を除き、不定形をとると、未来時制の他は時を示す働きが失われて、動作の仕方、動作や状態が全体として見られているか、連続した動作や状態の「真っ只中にある」一部分が見られているのかなど、一般に「アスペクト *aspectus*」と呼ばれる特性だけを表す。そして、アオリストに優勢なのは動作を全体として見るアスペクトであるため、問題の「増えること」は前述の直説法現在と大きく異なり、全体として見られた「増えるという事態」を表していると考えられる。この点も考慮して該当する文面を読み直すと、大きさのないものが付け加えられているさなか、付け加えを被っている側はそれでもなお、大きさに関しては一向に増えることができない、と述べられていたのである。議論をやや先取りすると、ここで「大きさに関しては」と明確に限定されていることが、断片を解釈するうえで極めて重要な意味をもつ。しかし、この問題を検討する前に、付け加えだけではなく、取り除きについても論及している断片最後の文を、できるだけ慎重に解説しておかなければならない。というのも、たとえば付け加えられた分だけ後に取り除かれるのであれば、あるいはまた、付け加えられているさなかに、同じ分の

取り除きも併行しているのであれば、付け加えを被っている側が大きさに関して一向に増えないのは、大きさがあるものの付け加えや取り除きの場合を含め、そもそも厳密な論理に訴えるまでもなく、当然のことになってしまうからである。

ゼノン最後の文で、何かが付け加えられる場合だけでなく、逆に何かを取り除かれる場合のことを一貫した論法で両面的に検討している。現在の瞬間に取り除きを被っている側が、もしも取り除かれている現在の終わりとして仮定され、しかも不断に継起しているこの現在から切り離して仮定される未来の時点で、より小さくならないのであれば、未来の時点から振り返って、今、この瞬間に、取り除きを被っている側から取り除かれているものは、まったく存在していなかったことが判明する。これがゼノンの展開している論理の構造にはかならない。そして、現在の瞬間に付け加えを被っている側も同様に、もしも仮定される未来の時点で、増大することにけっしてならないのであれば、付け加えを被っている側に対して現に付け加えられているものは、未来の時点から振り返って何ら存在していなかったことが明らかなのである。以上のように、かれが用いている論理は一種独特のものであり、仮定される未来の事柄が必然的に成り立つことを根拠に、今この瞬間に進行していることなかで、何かが否定される形式になっている。上掲の断片でいうと、否定される何かとはすなわち、付け加えられているさなかであれ、取り除かれているさなかであれ、大きさのないものが存在していることにかならない。しかし、ここで導かれた結論が成り立つ場合、大きさがまったくないものとは一体どのようなものであろうか。

たとえば、色（色彩）は大きさがあるものに付帯している限りでのみ存在し、如何なるものにも付帯しない状態で存在することはできない。また、当然すぎることであるが、色はそのものとして「大きさがまったくないもの」であり、大きさがあるものに属するという仕方でのみ存在している。この意味で、大きさがあるものに属していない色は、ゼノンが述べているとおりの「大きさがまったくない」のであり、大きさがある何かに付け加えられても——すなわち大きさがある何かに属することになっても——「大きさに関しては」その何かが増えることなどありえない。実際、大きさがある白い物体に青い光を当て、その物体に青い色を付け加えても、同じその物体はより大きくならず、また青い光の照射を止め、青かったその

物体から青さが取り除かれても、同じその物体はより小さくならないだろう。かれの論証は、このように、述べられているまま色について成り立つ。とはいえ、この例で仮定されている未来の事柄、つまり大きさに関しては変わらないということが成り立っても、それを根拠にして、青さが物体に付け加えられているさなかに、あるいは取り除かれているさなかに、青さは端的に存在していなかったのだろうか。

たしかに、ゼノンが結論づけているとおり、青さはそれが付け加えられているさなか、大きさを伴わない青そのものとしては存在していない。それでも、青さは大きさがあるもの（事物）に属するという仕方、否定しようもなく存在している。青さはまた、それが取り除かれているさなかも、端的に存在していないのではない。大きさがあるもの（事物）に属するという仕方、存在している青さは、それが取り除かれているさなかに、同じそのもの（事物）には「属さなくなる」という仕方、存在しなくなるのである。

しかし、ゼノンの論証は、誤っているのだろうか。これは微妙でありながら重要な問題である。なぜなら、かれの論証は色について成り立たないどころか、明言されていたとおり「大きさに関しては」色についても厳密に成り立つからである。繰り返しになるが、青さはそれが付け加えられているさなかも、取り除かれているさなかも、大きさを伴わない青そのものとしては存在していなかった。ゼノンの結論はこの意味で正しいのである。しかも、それだけではない。かれの論証はさらに、色や肌理^{きめ}その他、大きさを伴わなければ存在しえないものが、どのような仕方、存在しうるのかという、基本的でありながら見逃されている問題に、われわれを直面させていたのである。

ここでは、本節のはじめに引用して訳出した断片が、叙述どおりに理解されるかぎり厳密に成り立つ論証を伝えている点、ならびに理論の構築にむけて解決しなければならない重要問題の発見を促している点に着目しておきたい。

第2節 大きさの相対化とギリシア語の現在時制

シンプリキオスは『アリストテレス「自然学」注解』のなかで、次のように解説しながら、ゼノンの著作から引用したと思われる文言を記してい

る。なお、原文中の [] 内は編者による補足であり、訳文中の [] 内は前節と同様、訳者による補足や換言などである。また、原文中にある括弧付きの [δν.] は、LM, D5 の該当箇所では《δν》にカンマが後続しないことを表し、原文全体の下から 2 行目でカンマの直後にある括弧付きの ['] は、LM, D6 のカンマに替わる DK, B1 の——近代語のコロンまたはセミコロンに相当する——表記であることを示している。

DK, B1; LM, D5 Simpl. *In Phys.*, 140, 34-141, 2.

τὸ δὲ κατὰ μέγεθος [nämlich ἄπειρον ἔδειξε] πρότερον κατὰ τὴν αὐτὴν ἐπιχείρησιν. προδείξας γὰρ ὅτι “εἰ μὴ ἔχοι μέγεθος τὸ δν [δν.] οὐδ’ ἂν εἴη”,

かれ [ゼノン] はあらかじめ同じ攻撃的推論で、大きさが [無限のものを論証した]。というのも、かれは「もしも存在しているものが大きさをもっていない [希求法現在]」のであれば、それは存在していないであろう [希求法現在]」と先に論証し、

DK, B1; LM, D6 Simpl. *In Phys.*, 141, 2-8.

ἐπάγει “εἰ δὲ ἔστιν, ἀνάγκη ἕκαστον μέγεθος τι ἔχειν καὶ πάχος καὶ ἀπέχειν αὐτοῦ τὸ ἕτερον ἀπὸ τοῦ ἑτέρου. καὶ περὶ τοῦ προύχοντος ὁ αὐτὸς λόγος. καὶ γὰρ ἐκεῖνο ἔξει μέγεθος καὶ πρόξει αὐτοῦ τι. ὁμοιον δὴ τοῦτο ἅπαξ τε εἰπεῖν καὶ ἀεὶ λέγειν· οὐδὲν γὰρ αὐτοῦ τοιοῦτον ἔσχατον ἔσται οὔτε ἕτερον πρὸς ἕτερον οὐκ ἔσται. οὕτως εἰ πολλὰ ἔστιν, ἀνάγκη αὐτὰ μικρά τε εἶναι καὶ μεγάλα, ['] μικρὰ μὲν ὥστε μὴ ἔχειν μέγεθος, μεγάλα δὲ ὥστε ἄπειρα εἶναι”.

かれは以下のように [論を] 進めている [からである]。「ところで、もしも存在しているのであれば、それぞれが何らかの大きさと厚みをもっていなければならない。またそれぞれの一方の側は他方の側から分かれたるのでなければならない。そして、前方に [大きさを] もっているものについても、同じ道理になる。なぜなら、それもまた大きさをもっていることになり [直説法未来]、しかもそれはそれ自身の [大きさの] いく分かを前方にもっていることになる [直説法未来] からである。これ

ゼノンのパラドックスについて (1)

を一度だけ言う〔アオリスト不定詞〕のと常に言っている〔現在不定詞〕のとはまったく同じことである。というのも、それ〔前方に大きさをもっているもの〕に属する、そのような終端は存在しないことになり〔直説法未来〕、また一方の側にとって他方の側が存在しなくなる〔直説法未来〕こともないからである。このようにして、もしも多〔複数形〕が存在しているのであれば、それは小さく、かつ大きくなければならず、一方で大きさが無いほど小さく、他方ではまた無限であるほど大きくなければならないのである〕。

本節で最初にあげた断片は、すでに前節で検討したことを再確認するものである一方、ゼノンがその直後に論を進めているという文脈で引用された断片は、条件節の主語が不在のため、それが何であるのかを推定しなければならない。

推定の手掛かりとして、シンプリキオスがゼノンの著作をどのように読んでいるのか、まずはこの点を確認しておきたい。前節であげた断片の直前には次のように述べられている。なお、原文中の [...] は、LMの編者による省略箇所であることを示している。

LM, R12 Simpl. *In Phys.*, 139. 3-9.

καὶ εἰκὸς μὲν ἦν τὸν Ζήνωνα ὡς ἐφ' ἑκάτερα γυμναστικῶς ἐπιχειροῦντα [...] καὶ τοιοῦτους ἐκφέρειν λόγους περὶ τοῦ ἐνός ἀποροῦντα· ἐν μέντοι τῷ συγγράμματι αὐτοῦ πολλὰ ἔχοντι ἐπιχειρήματα καθ' ἕκαστον δείκνυσιν ὅτι τῷ πολλὰ εἶναι λέγοντι συμβαίνει τὰ ἐναντία λέγειν· ὧν ἓν ἐστὶν ἐπιχείρημα, ἐν ᾧ δείκνυσιν ὅτι “εἰ πολλὰ ἐστὶ [...] ὥστε μὴθὲν ἔχειν μέγεθος”.

そして、ゼノンが訓練として両方の向きに論を進めており、[...] 難問を提起しながら、一なるものについてもそのような議論を生み出しているというのは、実にもっともなことであったけれども、かれは多くの攻撃的推論を保有している自著のなかで、多〔複数形〕の存在を語っている者は、反対のことを語る結果になると、それぞれ〔の攻撃的推論〕で論証しており、それらのなかの一つが「もしも多〔複数形〕が存在しているのであれば、[...] まったく大きさをもっていないほど」と論

証している攻撃的推論なのである。

ここから、シンプリキオスが適切な仕方では引用しながらゼノンの論証を解説しているとすれば、上掲断片の条件節で省略されている主語は、複数形の「多 *πολλά*」だと考えられる。そして、ギリシア語では主語が複数形であっても、中性名詞の複数形である場合、対応する動詞は「存在している *ἔστι(ν)*」のように、単数形をとるので、この読み方は文法にも適っている。しかしながら、断片中に動詞「存在している *ἔστιν*」の主語がないことは事実である以上、ゼノン当人は多に特殊化されない「存在しているもの *τὸ ὄν*」またはその複数形「存在しているものども *τὰ ὄντα*」について先に論証し、如何なるものについても必然的に成り立つことを、特殊な存在である多にあらためて適用しているのかもしれない。その余地も残せるように、訳文では著作断片の原文と同様、主語が省略されている。

また、LM, D6 全体を見渡すと、1行目と6行目に「もつ」という動詞が不定詞の《*ἔχειν*》で、3行目には直説法未来の《*ἔξει*》で用いられ、接頭辞《*προ-*》を伴った「前にもつ」という意味の動詞が、2行目には現在分詞の属格《*προύχοντος*》で、3行目には直説法未来の《*προέξει*》で登場している。では、何を「もつ」のかというと、それは問題の断片で都合3回も使われ、シンプリキオスも引用の直前に論及していた論証の鍵、すなわち「大きさ *μέγεθος*」にはかならない。そして、存在しているのであれば、それには大きさがあり、大きさがある以上、存在しているものは一方の側と他方の側に分けられる。つまり、分割できない大きさは、もはや大きさではありえないということである。前方に大きさをもっているものも同様であり、もしも存在しているのであれば、全体として大きさがあるだけでなく、その大きさのいく分かを前方にもっていて、残りの分は後方にもっているのである。ゼノンの議論はここまで困難なく読み解けるといってよいだろう。

しかし、もしも存在しているのであれば「何らかの大きさと厚みをもっていなければならない」ということが、ことさら複数形のもの（多）について指摘されている理由は不明である。なぜなら、断片の文脈を自然に辿るかぎり、単数のものであっても存在している以上、何らかの大きさと厚みをもっていなければならないことになりそうだからである。さらに、困難なく読み解けた箇所に続く言い分には、少なくとも今日の観点からすると

異様さがある。

ゼノンによると、もしも前方に大きさをもっているものが存在しているのであれば、その大きさのいく分かを前方に、残る分を後方にもっていることになる。そのような未来が現時点で必然的に導かれると、一度だけ言うのと常に言っているのは、まったく「同じこと *ὁμοιον*」である。かれは暫定的な結論をこのように定式化し、原文 (LM, D6) 4 行目の後半から——上掲の訳文では「というのも」で始まる 9 行目からの文で——、定式化した暫定的な結論が必ず成り立つ理由を説明しているのである。その第一の理由とはすなわち、前方に大きさをもっているものが、それ自身の大きさの「いく分かを前方にもっている」ということに終わりはなく、そのような終端は存在しないという未来の必然性にほかならない。ごく普通にこの箇所を読むと、理由とされているのはむしろ、暫定的な結論から導かれることではないかと思われる。

実際、もしも「常に言っている」を「繰り返し言う」と解釈してよいなら、それ自身の大きさのいく分かをもっている前方も、存在しているかぎり、それ自身の大きさの「いく分かを前方にもっている」もの、つまり「前方に大きさをもっているもの」であるから、自らの大きさのいく分かを前方にもっていて、当の前方も存在しているかぎり、それ自身の大きさの「いく分かを前方にもっている」ものであるといったように、際限なく繰り返し言うことができる。まさにこのような仕方では、前方に大きさをもっていることに、終端は存在しないという未来の事柄が「結論として」必然的に導かれるのではないだろうか。しかし、ゼノン本人はあくまでも、そのような終端が存在しないことになる必然性を理由にして、前方に大きさをもっているものがそれ自身のいく分かを前方にもっていることになると「一度だけ言うのと常に言っているのはまったく同じことである」という暫定的な結論の側を説明しているのである。さらに、第二の理由が直後に追加しているので、その意図も探らなければ、議論の真意には迫れない。

第二の理由とは「一方の側にとって他方の側が存在しなくなることもないから」である。見てのとおり、これは前方に大きさをもっているものに適合する内容であるけれども、前方だけに限らず、より一般的に、大きさをもっている存在しているものすべてに適合する内容である。ゼノンは当初、前方に大きさをもっているものではなく、大きさをもっているも

の一般を問題にしていた。「もしも存在しているのであれば、それぞれが何らかの大きさや厚みをもっていなければならない、またそれぞれの一方の側は他方の側から分かつたものでなければならない」。かれは上掲断片のはじめにこう記している。このことから、いま問題にしている「一度だけ言うのと常に言っているのとはまったく同じことである」という暫定的な結論が成り立つ理由は、前方と後方の区別を前提としない、一方の側と他方の側という関係にまで問題設定を拡大しなければ、けっして十分には説明できないと考えられていたのである。言い換えれば、ゼノンが日常的に自明視されている前後の区別さえも相対化しながら、暫定的な結論の根拠づけに挑んでいたと推察される。

また、前後の区別と関係は、連想の重なりから、時間的な前後関係の理解と表裏する点にも注意したい。というのも、前後関係の相対化は、時間観念にまで即座に影響するからである。現在のわれわれにとっても、時間で考えた場合の「前」はすでに過ぎ去った「以前」を指すだけでなく、これから直面することになる「目前」や、時間軸上の先に位置する「未来」さえ指しうる。同様に、われわれが思い描く「後」は、現時点よりも後に位置する「以後」だけではない。たとえば、勉強の遅れている生徒は、勉強の進んでいる生徒がすでに終えた「過去」の学習段階にあるので、勉強の進んでいる生徒よりも「後」に位置しているのである。このように、ゼノンが断行している相対化は、空間と時間に関する基本中の基本理解にまで直結することが分かる。とはいえ、かれが根拠づけようとしている暫定的な結論は、どのような趣旨のものなのであろうか。そもそもこの点が不明というほかない。外見上は単純に思えても、正確に理解しようとすればするほど謎めいてくるのが、ここで問題にしている暫定的な結論である。「一度だけ言うのと常に言っているのとはまったく同じことである」。少なくとも、単独の一文として読むかぎり、これはほとんど禅問答というほかない。ところが、その趣旨を理解する糸口は、前節でも触れたギリシア語のアスペクトにある。

ギリシア語の現在時制で優勢なのは、連続ないし継起する動作や状態の「真っ只中にある」一部分といった、一種独特のアスペクトである。しかし、日本語にもこれと類似した表現があるので、具体的な用例をもとに検討することにした。プラトン（プラトーン）の対話篇『パイドーン』では、登場人物の一人であるパイドーンが、次のように語っている。

Plat. *Phaed.*, 58a.

πλοῖον ἐς Δῆλον Ἀθηναῖοι πέμπουσιν.

アテーナイ人たちはデーロスに船を送っている。

この台詞に見られる三人称複数形の動詞「送っている *πέμπουσιν*」が、まさに直説法の現在時制であり、現在という時を示すと共に上記のアスペクトを表している。これは「いま船を送り出す作業に従事しているところだ」とも「船はデーロスに送られていて、まだ戻っていない」とも読める。しかしながら、同対話篇の文脈をたどると、このどちらでもなく、アテーナイ人たちは毎年デーロス島にあるアポローン神殿の祭事に、船で使節を派遣していると語られているのである (*ibid.*, 58b)。日本語の「送っている」という表現もこれと同様の意味合いをもちうるのではないだろうか。いずれにしても、パイドーンが語るアテーナイ人たちの現在は、連続ないし継起する動作や状態の「真っ只中にある」一部分であり、かれはそうした趣旨のことを語っていたのである。そして、継起や反復の周期ないし間合いは、たとえば4年おき、毎日、脈打つごとに、その他、また定期的でない場合など、様々でありうる。しかし、ここであげたプラトンの用例がその典型であるように、現在時制で表された連続ないし継起する動作や状態は、今までと今後の両方向に接続している「真っ只中」の一部分なのである。

以上から推察されるように、現在時制で「アテーナイ人たちはデーロスに船を送っている」と、一度だけ言うのと常に言っているのとは、現在時制のアスペクトからしてまったく同じことでありうる。ゼノンはおそらく、ギリシア人たちが言語の慣用から自明視していた思考様式を、明確に浮かび上がらせてシンプルに定式化し、暫定的な結論として提示するとともに、それを「前方に大きさをもっているもの」と「大きさをもって存在しているもの一般」に適用しながら、厳密に根拠づけていたのである。しかも、現存する断片では、根拠（理由）づけが二段構えになっていた。この点についても慎重に検討しなければならない。

まず、前方に大きさをもっているものが前方と後方に分割される場合、分割される前方には全体の一部分に相当するいく分かの大きさがあり、大きさをもって存在しているその前方もまた、前方に大きさをもっているも

のであるから、それを前方と後方に分割すると、分割される前方には全体の一部分に相当するいく分かの大きさがあり、…といった連続ないし継起する操作には、前方に大きさをもっているものに属する終端が存在しないことになる。これが第一の根拠（理由）であり、必然的に導かれる未来の否定的な事柄をもとに、現在時制で表現されている暫定的な結論が根拠づけられている。前節で検討した断片の論証形式と異なるのは、必然的に導かれる未来の事柄にもとづいて、今この瞬間に進行していることのなかで何かが否定されるのではなく、暫定的な結論として定式化されているギリシア（語）的な思考様式が、現在時制のアスペクトに蔵された「今の実情」と照合されている点である。そして、すでに確認したとおり、この段階では前方と後方が固定されていて、まだ相対化されていない。

続く第二の根拠（理由）づけでは、存在しているもの一般にまで対象範囲が拡大されて、大きさをもって存在しているものが二分されているさなか、分割で生じる一方の側にとって他方の側が存在しなくなる（直説法未来）ことはないという理由で、現在時制で表現されている暫定的な結論が根拠づけられている。このように、第一の根拠（理由）づけと同様、第二の根拠（理由）づけでも、必然的に導かれる未来の事柄にもとづいて、暫定的な結論が実情と照合されていた。換言すると、前方に大きさをもっているものが、それ自身の大きさのいく分かを前方に、残りの分を後方にもっていることに必ずなるのは、一方の側にとって他方の側が存在しないことにはならないからであり、そうならない以上、論証にあたって「一度だけ」言う実情と照らし合わせると、これを「一度だけ言うのと常に言っているのとはまったく同じことである」という暫定的な結論づけは、きわめて有効であると主張されていたのである。しかし、この第二段階では前方と後方が相対化され、前述のように時間的な前後関係にまで相対化が貫かれるため、暫定的な結論として定式化されている思考様式は、第一段階では一方向に固定されていた前方と後方の関係から解放されている。このことからすると、問題の暫定的結論は、以前と以後の両側にむけて、いわば「双方向的」に根拠づけられているのである。そして、ゼノンの断片では、このように根拠づけられた暫定的結論が、あらためて複数形の多に適用される文脈になっていると理解してよいだろう。

もしも多（*πολλά*）が存在しているのであれば、それぞれ（*ἕκαστον*）が何らかの大きさと厚みをもっていなければならない、またそれぞれの一方

の側は他方の側から分かたれるのでなければならない。これは主語のない断片冒頭の文に、その主語として複数形の「多」を当てはめた、あるいは代入したものである。これを読み解くと、条件節の主語である複数形の「多」が、帰結節（主節）では中性・単数の代名詞「それぞれ」で言及されているのであるから、たしかに《ἐκαστον》は中性・複数の名詞を指示する場合があるとはいえ、この代名詞が指示しているのは中性・単数の「多 τὸ πολὺ」それぞれであるとも考えられる。そうした単数のものが、いずれも何らかの大きさや厚みをもっていなければならない、また単数の多は例外なく大きさや厚みをもっている以上、どれも一方の側と他方の側に分割されるのでなければならない。ところが、二分割されるのであれば、いずれの多も複数形の多となる（未来）のは必然であるから、分割のさなかで多が単数であること（現在）は否定されるのである。

そして、ゼノンの論証形式に従えば、これを一度だけ言うのと常に言っているのとはまったく同じことである。すなわち、複数形の多（全体）を構成する個々の要素（部分）として、全体よりも小さい単数の多が、二分割されるさなかで構成要素（部分）よりも大きい複数形の多（全体）なのである。しかも、このことはすでに判明したように、以前と以後の両側にむけて双方向的に成り立ち、絶え間なく継起する二分割の「真っ只中にある」一部分にほかならない。パイドーンの台詞がそうであるのと同様、複数形の多（全体）を構成する個々の要素（部分）は、上記のような現在時制のアスペクトで「分割されている」のである。このため、もしも多（複数形）が存在しているのであれば、同じその多（複数形）は際限なく分割されてきているものとして、大きさが無いほど小さく、これからも際限なく分割していけるものとしては無限であるほど大きい。断片最後の一文は次のとおりであった。「このようにして、もしも多〔複数形〕が存在しているのであれば、それは小さく、かつ大きくなければならず、一方で大きさが無いほど小さく、他方ではまた無限であるほど大きくなければならぬのである」。かなり唐突に思えたこの言い分は、しかし、ギリシア語の現在時制に特徴的なアスペクトに着目すると、以上のように首尾一貫して導かれた指摘として読み解ける。

さらに、この不合理的な指摘を避けるために必要な条件を考えると、分割して生じる部分の大きさが分割に先立つ全体の大きさと変わらないのであれば、分割前の大きさが無限大に接近していくことも、分割後の大き

さが無に近付いていくこともなくなる。しかし、分割しても大きさが変わらないのは、もともと大きさをもたないものだけであるから、多（複数形）は大きさをもたないものでなければならない。つまり、多（複数形）が大きさをもっていなければ、分割前の大きさが無限大に接近しないのはもとより、分割後の大きさが無に近付いていくのではなく、当初から一貫して、多（複数形）には大きさが無いということである。シンプリキオスはすでに見たとおり、ゼノンの著作についてやや詳しく言及して、同著が複数の攻撃的推論からなると解説していた。また、かれの解説によると、それぞれの攻撃的推論で、多（複数形）の存在を語る者は、反対のことを語る結果になるのであった。それらのなかの一つが、もしも多（複数形）が存在しているのであれば、それは大きく、かつまた小さいのであり、一方で大きさが無限であるほど大きく、他方ではまったく大きさをもっていないほど小さいという、反対のこと——多の存在が逆に脅かされるようなこと——を語る結果の一实例にほかならなかったのである。

ここまで、存在しているもの一般、前方に大きさをもっているもの、および多（複数形）へと対象範囲を区別して、ゼノンの断片に見られる論証の形式と内容について検討してきた。しかし、念のために確認しておく、シンプリキオスの注釈と引用の仕方に誤りはない。なぜなら、かれはゼノンの攻撃的推論がもたらす結論を「もしも多が存在しているのであれば、[...] まったく大きさをもっていないほど小さいのである」と解説しているだけであり、かなり後になってから引用することになるゼノンの議論が、多（複数形）を主語としているとは述べていないからである。それどころか、本節のはじめに引用して訳出したとおり、シンプリキオスは「もしも存在しているもの (*τὸ ὄν*) が大きさをもっていないのであれば、…」と、存在しているものが主語の文を引用したうえで、直後に続く一連の論証へと接続させていたのである。おそらく、ゼノンは「たとえ何であれ存在しているのであれば、…」という趣旨で、意図的に主語を省いているのであろう。他方、本節の最初に引用した文には、編者によって「大きさが[無限のものを論証した]」と補足されていたが、この補足は誤りだと思われる。というのも、本節で検討している著作断片で、多（複数形）は「無限であるほど大きくなければならない」と述べられているのであり、それが端的に「無限である」とは述べられていないからである。この点はともかく、以上のように解説されたゼノンの論証は、はたして妥当な

ものであるのか否か、また仮に妥当な論証であるとして、それは如何なる意味で妥当なのであろうか。

ゼノンの論証はここでも、叙述どおりに理解されるかぎり必然性もち、結論も語られているとおり厳密に成り立つ。たしかに、解釈するにあたって、何らかの前提を外から持ち込むのであれば、どのようにでも批判可能である。しかし、それは喩えていうと、サッカーの試合を野球のルールに則って判定するようなことでしかない。もしも多(複数形)が存在しているのであれば、多は大きさをもっていないことになり、前以て「もしも存在しているものが大きさをもっていないのであれば、それは存在していないであろう」と論証してあったのだから、多(複数形)はそもそも存在しないのである。しかし、前節であげた色や肌理などがそうであったように、そのものとしては存在していない多(複数形)が、大きさをもって存在しているものに属するという仕方では存在することは妨げられていない。また、多(複数形)それ自体は、限りなく大きいと同時に限りなく小さくしなければならなくなってしまうので、絶対的な大きさをもつものとしては存在できない。しかし、全体と部分の関係から、無の場合を除いて一般に、全体は部分よりも大きく、部分は全体よりも小さいのであり、相対的な大きさの違いがあることは、分割の前後で必ず維持される。これはゼノンの議論そのものが前提にしていることでもある。したがって、多(複数形)は相対的な大きさで、他の何かに属することを妨げられていないのである。さらに、ゼノンの論証は厳密な理論を構築するために、避けては通れない重要な問題の発見を促している。

断片の一部を振り返ってみよう。「というのも、それ〔前方に大きさをもっているもの〕に属する (*αὐτοῦ*)〔属格〕、そのような終端は存在しないことになり、また一方の側にとって他方の側が存在しなくなることもないからである」。ここで注目したいのは、あくまでも前方に大きさをもっているものに「属する」そのような終端が問題にされ、それが存在しないことになると述べられているのであって、前方に大きさをもっているものに属していない終端は、慎重に除外されている点にほかならない。断片を叙述どおりに読むと、それ自身の(大きさの)いく分かを前方にもっていることの終端は、前方に大きさをもっているものに「属しては」存在しないのである。たとえば、棒の前方で考えると、その先端は空気と境界を接している。そして、両者の境界は棒にも空気にも属していないので、一方

の側が棒と空気の境界であり、他方の側が棒のあらゆる部分であれば、境界は一方の側（当の境界）にとって、他方の側が存在しなくなる終端であってもよい。また、空気中にある球体と空気の境界は、球体にも空気にも属さずに両者と接している球面にほかならない。このように、何かと別の何かの境界は、そもそも何かがなければ存在しえないとはいえ、大きさをもつものが存在しているときには必ず、その何かに属することなく、純粋な形と大きさとして共に存在している。それゆえ、純粋な形と大きさを問題にしている幾何学は、境界という極めて特異な存在を研究対象にしていたのである。（つづく）

註

- (1) F. M. Cleve, *The Giants of Pre-sophistic Greek Philosophy: An Attempt to Reconstruct their Thoughts*, vol. 1, 3rd. ed., Martinus Nijhoff: The Hague 1973, p. 166f.
- (2) Cf. e. g. M. Schofield, *An essay on Anaxagoras*, Cambridge UP: Cambridge · New York · New Rochelle · Melbourne · Sydney 1980, p. 81.
- (3) H. Diels, *Die Fragmente der Vorsokratiker*, hrsg. von W. Kranz, 1. Band, 6. Aufl., Weidmann: Dublin · Zürich 1972. 本文中では略記号 DK で表し、慣例に従い、著作断片は B に断片番号を添えて、例えば B2 のように出典を示す。A. Laks & G. W. Most (eds.), *Early Greek Philosophy*, vol. V, part 2, Harvard UP: Cambridge · Massachusetts · London 2016. 本文中では略記号 LM で表し、学説は D に資料番号を添えて、例えば D7 のように、証言や言及は R に資料番号を添えて、例えば R12 のように出典を示す。DK と LM の両方に掲載されている場合はそれぞれの略記号を併記する。なお、DK と LM で差異がある場合は、特に断り書きしないかぎり前者の側を [] 内で表示する。また、原文の引用に際しては、DK で並べ置きのイーオタ (iota adscriptum) が用いられている場合も、小文字については LM の表記法に従って、下書きのイーオタ (iota subscriptum) を用いることにする。

